



監修・朝日大学教授 藤野良孝

声

③

運動にも生かせる「オノマトペ」

このコーナーでは、スポーツと体の動きの結びつきをほり下げて、体を動かす楽しさや奥深さを紹介します。今回は動きやリズムを音で表現するスポーツオノマトペについてです。

朝日大学教授の藤野良孝さんは「スポーツオノマトペ」を研究しています。オノマトペとは、ものごとの状態や動きを音で表す言葉のこと。作業がはかどる時の「テキパキ」や、かたい物をぶつけた時の「ガチャン」などがあります。スポーツの世界でもこのオノマトペが、声と関わりながら広く使われているそうです。

サッカーの解説者はよく、キーパーの頭をこすような軌道のループシュートを「フワッ」とけったと言います。ボールがとぶ角度や力の入れ具合を短い時間で細かく説明するのは難しい一方、オノマトペなら一言で伝えられます。

口には出さずに「心の声」を使うことも。陸上競技の跳躍種目では、とぶ前に頭の中で「タ

ッ・ターン」や「トゥ・トーン」などの音をつぶやく選手がいます。うまくとべた時の助走の運びやジャンプのようすを音のリズムで覚えておいて、とぶ直前に頭の中でリハーサルして動きを再現します。

とび箱で「サーッ・タン・パッ・トン」

スポーツオノマトペはスポーツ選手だけに限らず、運動が苦手な人も生かせると藤野さん。たとえばとび箱。「助走、ふみ切り、手をつく、着地」とちがう動きが連続する複雑な運動ですが、それぞれ「サーッ・タン・パッ・トン」とオノマトペで表すことができます。

一言で「とび箱が苦手」といっても、うまく



走り高とびのムタズエサ・バルシム選手=2022年7月、アメリカ・オレゴン州 代表撮影

できていない動きは人によってちがいます。助走がおそいのなら「サーッを高い声にする」、ふみ切りが弱ければ「タンをダンにかえる」。それだけで見ちがえるように動きが良くなることもあるそうです。「音で伝えると、言葉で細かく説明しなくても感覚でわかるのがふしぎ」。オノマトペで体にしみこませると日にちがたっても、成功した時の動きを忘れにくいという効果もあるといひます。



イラスト・栗山リエ